

1 条件設定に当たって

子どもは、教師の働きかけや教材（対象）「ひと・もの・こと」と出会うことで知的好奇心が喚起され、課題に対して自分の考えが生まれる。その考えを友達に伝え合うことで自分の考えの妥当性を確かめたり修正したりする。こうした交流によって、さらに対象にかかわり深く考える行為が生まれ、思考力・判断力・表現力等が育まれていく。しかし、自分の考えを持てず授業に参加できない、考えは持てたが自信が持てない、発言しても伝わらない、自分の意見は聞いてほしいが友達の意見には耳を傾けないなどのつまずきが少なくない。思考力・判断力・表現力につながる交流が生まれるには、次のような子どもの姿を目指す。それは、教材（対象）にかかわって得られた思いや考えを友達と共有し、子ども自身が何を伝えたいか誰に話すのかを意識して伝え合うなかで、比較する・分類する・関連づける見方を持って思考を高める姿である。このような姿を目指すことで、子どもが興味を持って聞き合う楽しさや新しい考え・視点に気付く喜びを経験し、それが学習・活動意欲へとつながり、思考力・判断力・表現力が育まれると考えた。よって、以下の条件を設定した。

- ・条件A 思いや考えをもち 互いに共有する
- ・条件B 目的意識・相手意識をもって表現をする
- ・条件C 比較する・分類する・関連づける見方ができる

2 条件について

・条件A 思いや考えをもち 互いに共有する

子どもどうしが交流を持つ前に、まず子ども自身が対象の教材「ひと・もの・こと」にどれだけかかわり、どんな思いや考えを持てたかが重要である。これまで獲得された知識（経験知・感性）や、子どもにとって興味が持続する教材かどうか対象に豊かにかかわることができる要因になるといえる。

また、話すことが苦手な不安をかかえる子どもが安心して伝え合うことができる場が必要になる。例えば、異学年交流など子供相互の協調的・共同的なかかわりが生まれる場を設定することで、子どもは他者の話を聞く必然性を持ち、話し合いが活発になる。

・条件B 目的意識・相手意識をもって表現をする

自分の考えを深めるためには、学習や活動を振り返り自分なりに整理・まとめをするとともに、思いや考えを他者と伝え合う活動が必要になってくる。言葉だけでなく絵や実物などを使って表現する工夫が考えられるが、誰に向かって何のために何を伝えるのかが明確でないと分かりやすい表現にはならない。一番伝えたいことは何なのか、説明するためにはどんな順序で説明したらいいのかなど他者に伝わるように表現することで、話し合いが充実していくであろう。

・条件C 比較する・分類する・関連づける見方ができる

自分と他者との意見の相違点や共通点を見つけることから話し合いが始まる。そのためには他者が何を話しているのかを理解しなければいけない。まず他者に意見や付け足し、質問ができるよう取り組む。そして、子どもの発言を受け教師が個人や全体に問い返すことで理解を促し、比較する・分類する・関連づける見方ができるようにすることが必要である。

3 おもな実践

(1) 生活科における実践例 ～単元名「1年生となかよし大作戦」～

本単元では、ようこそ1年生集会に続けて1年生となかよくする作戦を考え、サツマイモの苗植えや野菜紹介、インタビューを通して、楽しく伝え合い協力して活動ができる姿を目指した。

・条件A 思いや考えをもち 互いに共有する

＜手立て 伝え合う必要性があり、思いを持てる教材（単元）を作る＞

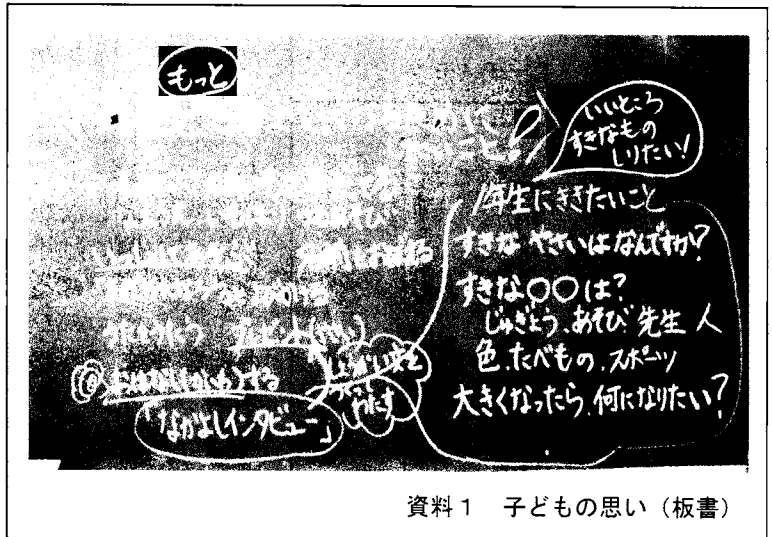
思いがつながる教材設定前単元「ようこそ1年生集会」では、実行委員が中心になって企画・運営する初めての集会であった。自分たちで進めていく自覚が実行委員だけでなく一人一人に感じられ、積極的に取り組む姿がクラスでの話し合いに見られた。昨年自分たちがしてもらったことを思い出し劇や紙芝居、クイズなど表現方法を工夫して学校紹介することができた。何よりも1年生が喜んでくれたことがうれしかったようで、1年生が書いた感謝の手紙を食い入るように眺めていた。この経験が単元「1年生となかよし大作戦」に大きくつながっている。

何をしたらもっと1年生と仲良くなるだろうかの問いに、右のような声（資料1）が挙げられた。ようこそ集会同様に、昨年の経験からサツマイモをいっしょに育てることは見通しがある。その活動に、もう一つの活動（なかよしインタビュー）を入れることによって、さらに1年生となかよくなれるだろうという期待を持つことができた。サツマイモの説明やインタビュー練習では、まずクラスの友達とシミュレーションし本番に臨んだ（写真1、2）。1年生に楽しく分かりやすく話したいという意識から、自分の説明やインタビューをよりよいものにしたと張り切る姿が見られた。

後日、聞き取ったことを元に紹介文（資料2）を作り、「1年生と野菜おもしろ大作戦」の最初にグループの中で読み合う時間をとった。緊張していた1年生の表情が柔らかくなり、グループで企画した野菜紹介も楽しく行うことができた。

その後の振り返りでは、1、2年生がグループ毎に輪を作り、言いたい人から感想を述べ合った。かしわっ子集会で行われている振り返りの形が自然に子どもの中に入っている。

この実践より、1年生と楽しくかかわりたい思いを全員が持ち、必要性を持ってペアやグループで話し合いが生まれたことから、教材（単元）設定の手立ては有効であると考えられる。



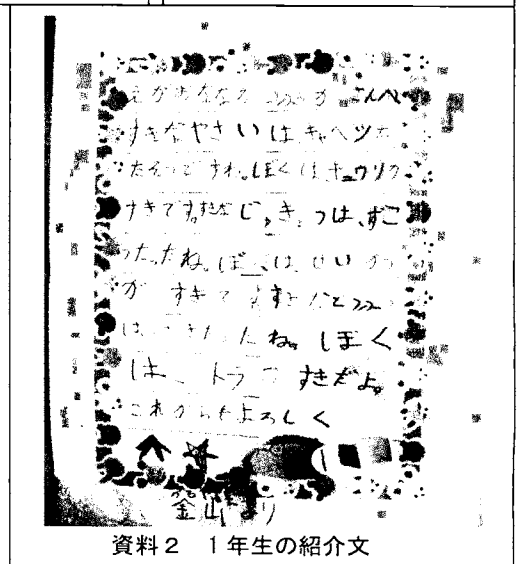
資料1 子どもの思い（板書）



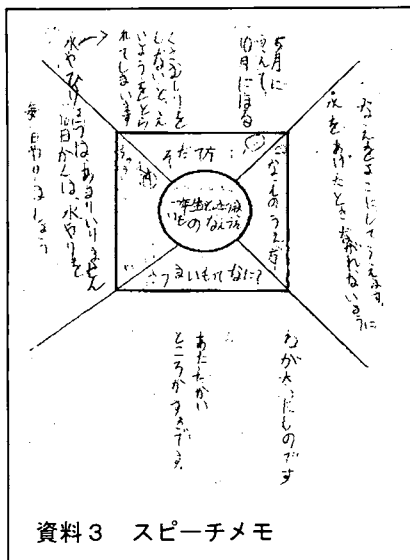
写真1 2年生とインタビュー練習



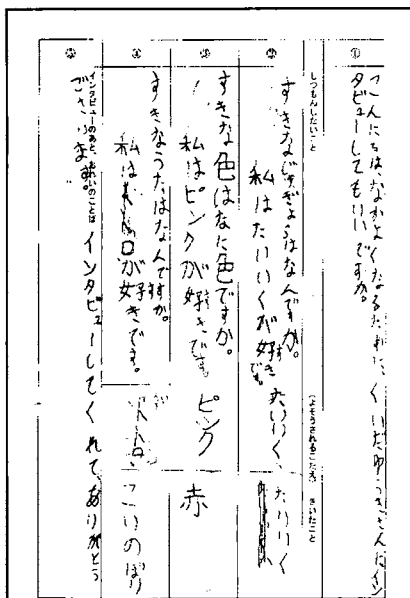
写真2 1年生と会話を楽しむ



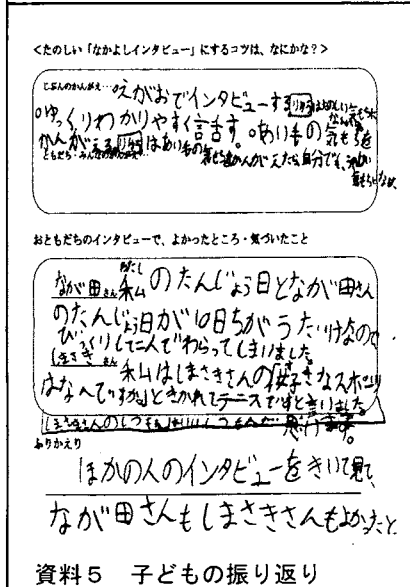
資料2 1年生の紹介文



資料3 スピーチメモ



資料4 インタビューシート



資料5 子どもの振り返り

・条件B 目的意識・相手意識を持って表現をする

<手立て スピーチやインタビューの組み立てを考えさせる>
誰に・何のために・何をやるのか、活動のめあてやポイントが子どもに意識付けられるよう、ワークシートを利用し分かりやすい表現を目指した。

サツマイモの苗植えを1年生に教えるときに、左のスピーチメモ(資料3)を使った。観点を三〜四つ四角の部分に書き込むことで、何について話すのかが明確になる。このワークシートは、国語科での「かんさつ名人になろう」でも使い、スピーチや文章を書くときの組み立てを考えるときに有効であると考えられる。本時では、観点を持ったことで指を折りながら丁寧に話す姿が見られた。苗を持たせ実物を使って動作しながら説明したことで、1年生が興味を持って聞きその後の苗植えを楽しく行うことができた。

また、1年生になかよしインタビューする準備で、左のインタビューシート(資料4)を利用した。まずインタビューする相手を想像しながら、聞きたい内容を考えワークシートに書く。次に下の欄には予想する答えを書くことで、相手とのやりとりをイメージできるようにした。

これら二つのワークシートを利用することは、思いついたことそのまま言うのではなく相手とのかかわりを想像して書く意味から、スピーチやインタビューの質を高めていく手立てになると考える。

・条件C 比較する・分類する・関連づける見方ができる

<手立て モデル提示を工夫する>

話している内容や話しぶりを対象化して、自分にはなかった視点を他者から受け入れることができることが大切である。学習活動の中で、失敗例も提示することも有効な手立てである。今回は、教師がインタビューシート(拡大版)を用意し、好きな野菜は何ですか。好きな遊びは何ですか。・・・と無愛想で矢継ぎ早に質問するモデルを提示した。たずねられた相手はどんな気持ちになったかなと問うことで、何が足りないのか考え合うことができた。話し合いでは、相手の気持ちになって笑顔でインタビューすることが大切という意見が子どもから多く出された。またインタビューシートに自分のこと(わたしは〇〇が好きなのですが・・・)を書き入れている子どもの意見を取り上げることで、二つの視点を価値付けることができた。

他に、上手なやりとりをしているペアをみんなの前でモデル提示することも相手に伝わる話し方や相手を理解する聞き方のポイントを知るうえで大切である。教師側からはうなずいて聞くこと、1年生に聞きたいことを質問するだけでなく、相手が答えたことからその理由やさらに詳しく質問を返す(問い返し)などの視点を紹介した。インタビュー練習後の振り返り(資料5)から、自分のインタビューと比べて、友達の良いところを認め、自分に取り入れようとする姿が見られた。

低学年にとって、比較・分類・関連づけの見方を身につけることは容易ではないが、自分との相

違点や共通点から気づきが生まれるよう、モデル提示の仕方を工夫することが有効であるといえる。生活科の他単元においても、子どものワークシート（観察カードなど）から良い表現を取り上げ（資料6、7）全体に広げることで、子どもに新しい視点を気付かせることが大切である。

(2) その他 国語科の実践より

・条件A 思いや考えをもち 互いに共有する

<手立て 話し合う必要感を持たせる場面を作る>

国語科の単元「ふきのとう」での音読発表会を行った。好きな場面ごとに分かれ、グループでどのように読むかを任せることで話し合う必要感が生まれ、役を決めたり動作のアイデアを練ったりとそれぞれのグループが頭をつき合わせて話し合いに熱中する姿があった。登場人物はどんな気持ちなのか、どの場所（どの高さ）で言った方がいいかという話し合いの成果が、本番でのアドリブを入れた音読や動作に表れていた。振り返りでは、友だちのよさやグループでの協力、楽しかったことが挙げられそれぞれの思いが共有できる場となった。「ふじだなおとぎ会」での発表や授業の音読にも生かされ、登場人物の気持ちを考えて動作やセリフを工夫する楽しさを覚えたようである。

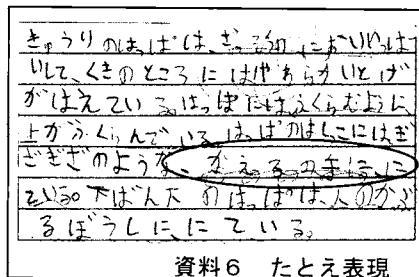
・条件B 目的意識・相手意識をもって表現をする

<手立て 作文メモ（伝えたいことは何か）を書かせる>

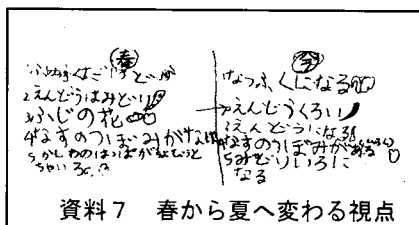
単元名「かんさつ名人になろう」では、生活科と合科的な学習として一人一鉢育てている「ミニトマト」を題材にした。ちょうど実がつき始めたところで、その様子をはやく観察したいという気持ちが子どもにあった。国語の教材文で何を観察するのか五感を使った観点を確認した後、あえて誰に伝えたい？と投げかけたことで、伝えたい気持ちが高まり、おうちの人や友達、遠くに住むおばあちゃんをイメージして書くという相手意識が生まれた。ワークシートは、文の組み立てを考えるための作文メモカード（資料8）を使った。何を伝えたいかをより意識できるワークシートになっていて、小見出し（目を見たものや手触りで感じたものなどの項目をつける）をつけ、全体の文章構成を考えることができる。2年生には難しい面もあるが、モデル（例文）を教師側が用意し提示することで、まとめることができた（資料9）。作文メモに書くことは、生活科の1年生の友達紹介文や野菜紹介に生かされ、相手に一番伝えたいことを表現するために文章構成のやり方を知る有効な手立てとなった。

4 今後に向けて

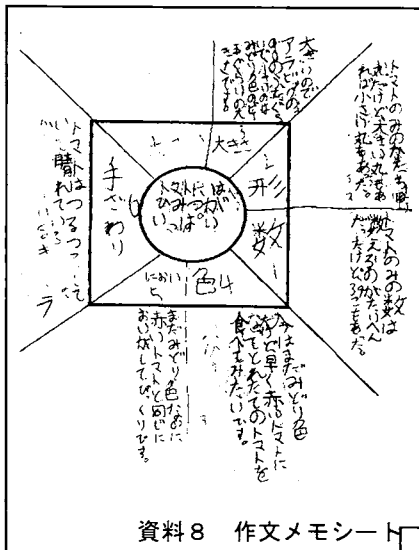
課題として、条件Cの分類する・関係付ける見方への実践、また意欲の高まった後にどう生かされたのかという検証が足りなかったといえる。この課題をふまえ、生活科の実践で他学年や地域の人へ、今回のインタビューや表現活動を広げていくことで、かかわりの質を高めていきたい。



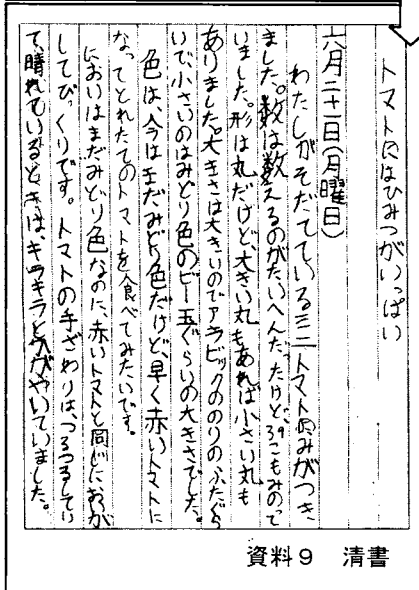
資料6 たとえ表現



資料7 春から夏へ変わる視点



資料8 作文メモシート



資料9 清書